

積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する外国語活動の工夫 —異なる集団とのコミュニケーションの場の設定による取組を通して—

三原市立沼田小学校 富本 利枝

研究の要約

本研究は、異なる集団とのコミュニケーションの場の設定による取組を通して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する外国語活動の工夫について考察したものである。文献研究から、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するには、外国語を通じて様々な相手と思いを伝え合うための工夫や伝わる喜び、伝える困難さを含めた体験を積み重ねていくことが大切であると分かった。そこで、同一単元の中で、学級とは異なる集団である中学生、ネイティブ・スピーカー、ノンネイティブ・スピーカーとのコミュニケーションの場を設定した。それぞれの場における相手とのやり取りで育成することができる児童の積極的な姿を明確にした上で取組を行った結果、児童が相手意識を明確にもち、相手に応じた伝え方や聞き方を工夫しながら思いを伝え合う姿が見られ、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成につながることが分かった。

キーワード：異なる集団 コミュニケーションの場の設定による取組

I 研究の目的

小学校学習指導要領解説外国語活動編(平成20年、以下「小学校解説」とする。)には、外国語を通じて積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ることが重点的な目標として示されている。国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的な施策(平成23年)には、「グローバル社会で求められる外国語能力とは、異なる国や文化の人々と外国語をツールとして円滑にコミュニケーションを図ることができる能力と言える。」¹⁾とあり、円滑にコミュニケーションを図ることができる能力の例として、外国語をツールとして異なる国や文化の人々と臆せず積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度などが挙げられている。

本校第6学年の児童は、9人中8人が「外国語活動の授業は楽しい。」と答えているが、その理由を、英語で歌ったりクイズやゲームをしたりするからとしており、ALTや友だちとの交流でも学習した単語や表現を発するだけで満足てしまっている。また、学級以外の相手と「外国語を通じてやり取りをしたい。」とした児童は57%と低く、異なる集団の中では進んで自己表現をしにくい。これらのことから、様々な相手に対して積極的にコミュニケーションを図る態度を育成することに課題がある。

したがって、学級だけでなく、集団を変えてコミュニケーション活動を行えば、相手に応じて聞き方や伝え方を工夫する必要が生まれるとともに、内容の違いや表現の広がりがあることに気付き、知的好奇心も持続できると考える。そして、「知りたい。」「伝えたい。」という意欲をもってやり取りをし、伝わる喜び、伝える困難さを含めた体験を積み重ねることで、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成につながると考える。

そこで、同一単元の中で計画的に複数回、学級以外の異なる集団とコミュニケーションを図る機会を設ける。これまでにも異なる集団と外国語を通じてコミュニケーションを図る取組は多く見られるが、同一単元において、集団を変えて複数回コミュニケーションを図る場を設定するという点で独自性があると考え、本研究題目を設定した。

II 研究の基本的な考え方

- 1 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成について
(1) 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度とは
「小学校解説」では、「コミュニケーションへの

積極的な態度とは、日本語とは異なる外国語の音に触れることにより、外国語を注意深く聞いて相手の思いを理解しようとしたり、他者に対して自分の思いを伝えることの難しさや大切さを実感したりしながら、積極的に自分の思いを伝えようとする態度などのことである。」²⁾と記されている。小学校外国語活動における評価方法等の工夫改善のための参考資料（平成23年）では、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度は、相手意識をもってコミュニケーションを図っている行動と捉えることが大切であると示されている。金森強（2011）は、自分の気持ちを上手に伝えるためには、声のトーン、顔の表情やジェスチャーなどが重要で、相手の気持ちになってみる、その場の状況に応じて声の調子を変えてみるなどの指導を勧めている。萬谷隆一（2012）は、積極的に言葉で通じ合おうとする最も大切な態度とは、言葉で伝える努力をすれば意図は伝えられるという自覚をすることであるとしている。また、明確に表現し理解しようとする態度について、「英語によるコミュニケーションでは、明確に表現し理解しようとする傾向があり、子どもにもそのような心構えや自覚を育てる必要があります。」³⁾と述べ、例として「Yes, Noをはつきり言う。」「自分の意見を曖昧にしない。」などを挙げている。中学校学習指導要領解説外国語編（平成20年）には、言語の働きについてのコミュニケーションを円滑にする例として、相づちをうつ、聞き直す、繰り返すなどが挙げられている。

これらのことから、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度とは、相手意識をもち、外国語を注意深く聞いて相手の言うことや思いを理解しようしたり、相手に自分の思いや考えを工夫し伝える努力をしたりして、コミュニケーションを図ろうとする態度であると考える。その態度が表れている具体的な姿を、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする具体的な児童の姿」（以下「具体的な児童の姿」とする。）とし、表1にまとめた。

（2）積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するには

「小学校解説」の内容には、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を育成するためには、外国語活動において児童が使える外国語を駆使し、様々な相手と互いの思いを伝え合い、コミュニケーションを図ることの楽しさを実際に体験することが大切であり、それなしにはコミュニケーションへの積極的な態度を育成することは難しいと示され

表1 積極的にコミュニケーションを図ろうとする具体的な児童の姿^{①)}

外国语を注意深く聞いて 相手の言うことや思いを 理解しようとする態度	相手に自分の思いや考え を工夫し伝える努力をする態度
聞く	話す
<ul style="list-style-type: none"> ・相手の言い方の工夫（声の調子や表情）や、ジェスチャーに注意する ・反応を示す（相づちなど） ・言葉を繰り返す ・聞き直す 	<ul style="list-style-type: none"> ・学んだ表現を駆使する ・自分の思いが伝わるような言い方の工夫（声の調子や表情）をする ・自分の意見をはつきりさせる（Yes/Noなど） ・ジェスチャーを用いる（身振り・手振りなど）

ている。直山木綿子（2014, 2013）は、外国語活動の本来の楽しさとは、コミュニケーションを図って新しい情報が得られること、またその新しい情報のことであると述べ、さらに、思いを伝えよう、相手の言うことを理解しようという工夫や、分かり合えたときの喜び、言葉で伝えることの難しさの体験を積み重ねることで、言葉を用いてコミュニケーションを図ることの大切さに気付き、それへの積極的な態度を身に付けていくとしている。そのため、授業では設定された語彙や表現に慣れ親しむだけでなく、実際に子供が自身で言葉を選んで自分の思いや考えを表現したり、相手の思いや考えを聞いたりするコミュニケーションの場が設定されなければならないとも述べている。

これらのことから、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するには、コミュニケーションの場を設定し、外国語を通じて様々な相手と思いを伝え合おうとする工夫、「伝わった。」「分かった。」という喜び、そして、なかなか伝わらない困難さを含めた体験を積み重ねていくことが必要であると捉える。

2 異なる集団とのコミュニケーションの場の設定による取組について

「小学校解説」では、第5・6学年の2学年間を通じて、体験的なコミュニケーション活動を行わせるに当たっては、友だちとの関わりから始め、国際理解に関わる交流などに発展させることができる事が示されている。また、多田孝志（2014）は「21世紀の人間育成を指向する小学校外国語活動では、学習プロセスをとおして、友達や地域の人々、また多様な文化をもつ人々とも円滑な人間関係を構築できる能力を培うことが希求される。」⁴⁾と述べている。

のことから、コミュニケーションの場の設定では、友だちとの関わりを大切にしながら、コミュニケ

ケーションを図る相手を広げていくことができるを考える。

そこで、コミュニケーションの場においては「具体的な児童の姿」をより効果的に育成するために、コミュニケーションを図る相手として、学級以外の異なる人々（中学生）や、異なる文化をもつ人々（ALTや留学生、地域に住む外国人など）を選んで設定することとする。

これらの異なる集団とのコミュニケーションの場を設定することにより、積極的な態度としてどのような姿を育成することができるか、次のように整理する。

ア 中学生とのコミュニケーションの場の設定

平木裕（2012）は、交流授業や学校行事を通して小中の教員や児童生徒が交流する機会をもつ取組は小学生には中学校英語へのあこがれが生まれ、中学生にとっては日頃の学習成果を披露できる機会にもなると述べている。したがって、学んだことを生かしてコミュニケーションを図ろうとしている姿に出会い、身近な手本とするためには、その相手として、中学生とのコミュニケーションの場の設定が有効であると考える。

この設定により、学んだ表現だけでなく、簡単な質問を受けてやり取りをしたり、言い方やジェスチャーなどを工夫してコミュニケーションを図ろうとする相手の姿を身近な目標として着目したりすることが可能となり、「具体的な児童の姿」（表1）の自分の意見をはっきりさせて話すこと、相手の言い方の工夫やジェスチャーに注意しながら聞くことなどを、より効果的に育成することができると考える。

イ ネイティブ・スピーカーとのコミュニケーションの場の設定

萬谷（2012）は、国際化する社会においてきわめて重要な明確に表現し理解しようとする態度を育成するには、普段から注意を促すだけでなく、外国語活動の中に「具体的な表現を使う力」を位置付け、それを育てていくことも大切になると指摘し、例えば、相手の言ったことが理解できない事態に対処することも、明確に表現し理解しようとする態度の一部と捉えている。したがって、児童が学んだ以外の表現と出会う中で、ジェスチャーで表して伝えようしたり、相手が言ったことが理解できない事態でも聞き直して理解しようしたりするためには、その相手としてネイティブ・スピーカーとのコミュニケーションの場の設定が有効であると考える。

この設定により、「具体的な児童の姿」（表1）の

ジェスチャーを用いて話すこと、相手の言うことや思いを理解しようと聞き直すことなどを、より効果的に育成することができると考える。

ウ ノンネイティブ・スピーカーとのコミュニケーションの場の設定

岡秀夫（2012）は、英語でのコミュニケーションは、今やネイティブ・スピーカーが相手だけではないといろいろな文化の人と交流する中で、英語が国際共通語として使われているので、世界の様々な文化への広い理解と寛容が必要になってくると指摘している。したがって、世界には様々な言葉があることを知り、母語が違っていても、互いの知っている英語を使えば、思いを伝え合うことができるということを実感する相手としてノンネイティブ・スピーカーとのコミュニケーションの場の設定が有効であると考える。

この設定により、「具体的な児童の姿」（表1）のジェスチャーを用いて話すこと、相手の言う内容を聞いて言葉を繰り返すこと、相手の言うことや思いを理解しようと聞き直すことなどを、より効果的に育成することができると考える。

以上のことから、目指す「具体的な児童の姿」に合わせてそれぞれの相手とのコミュニケーションの場を組み合わせて設定すれば、より効果的に、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成につながると考える。そこで、本研究の構想図を図1のように示す。

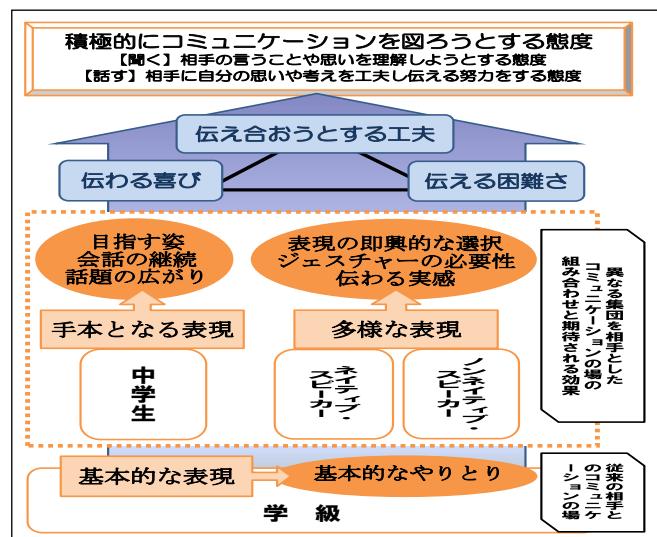


図1 本研究の構想図

III 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

異なる集団とのコミュニケーションの場を設定し、それぞれの相手に応じた伝え方や聞き方を工夫させれば、積極的に外国語を通じてコミュニケーションを図ろうとする態度が育成されるだろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表2に示す。

表2 検証の視点と方法

視点	方法
異なる集団とのコミュニケーションの場の設定による取組を通して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成につながったか。	・外国語活動アンケート、質問紙の事前・事後の分析、考察 ・行動観察、振り返りシートの分析、考察

IV 研究授業について

- 期間 平成27年6月11日～平成27年7月8日
- 対象 所属校第6学年1組（9名）
- 単元名 “Hi, friends! 2” Lesson 5
“Let’s go to Italy.”
— おすすめの場所を紹介しよう —
- 目標及び評価規準（表3）
 - ・自分のおすすめする場所やその理由を工夫しながら伝えたり、分からぬことがあってもあきらめないで聞いたりする。
 - ・おすすめの場所やその理由について伝えたり、尋ねたりする表現に慣れ親しむ。
 - ・世界には様々な人たちが、様々な生活をしていることに気付く。

表3 “Hi, friends! 2” Lesson 5 評価規準

コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語への慣れ親しみ	言語や文化に関する気付き
自分のおすすめの場所やその理由を、学んだ表現やジェスチャーを使って伝えたり、相手のおすすめの場所や理由を、反応を示しながら最後まで聞いたりする。	おすすめの場所やその理由について言ったり、そのことについて尋ねたりしている。	世界には様々な人たちが様々な生活をしていることに気付いている。

- コミュニケーションの場の設定の相手（図2）及び単元計画（表4）

本単元では、日本と世界のおすすめの場所を紹介し合うことから、社会科や総合的な学習の時間などの他教科・領域との関連を図りながら行うこととする。したがって、学級以外に中学生、ネイティブ・スピーカー、ノンネイティブ・スピーカーを相手としたコミュニケーションの場を図2のように組み合わせて設定する。その際、手本とな

る表現ができる中学生、多様な表現ができるネイティブ・スピーカー、ノンネイティブ・スピーカーの順で設定した。今回、ネイティブ・スピーカーはALTで、児童に分かりやすく言い換えをしながら臨機応変に対応ができるのに対し、ノンネイティブ・スピーカーとのやり取りでは、より困難を伴うと推測されるため、この順で行うこととした。「具体的な児童の姿」から、それぞれの場において特に目指す姿を「積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童の主な姿」として表4に表す。

従来 + 異なる集団	学級	9名。第1学年から同じ集団。複式学級を経験している。現在は単式学級。
	中学生	31名。校区内の中学校の第3学年。児童と面識がある生徒は数名。
ネイティブ・スピーカー	4名。市内のALT。児童とは初対面。	
	4名。インドネシアからの留学生3名、フィリピン出身の市内在住の社会人1名。それぞれ小学生時から英語の授業を受け、日常会話をすることが可能。児童とは初対面。	
ノンネイティブ・スピーカー		

図2 コミュニケーション活動を行う相手について

V 研究授業の分析と考察

1 それぞれの異なる集団とのコミュニケーションの場の設定が、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童の主な姿」の育成につながったか

「積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童の主な姿」の育成につながったかどうかを検証するために、事前質問紙及び各時間の振り返りシートでの分析、考察を行った。

(1) 学級とのコミュニケーションの場の設定による取組後について

学級でのコミュニケーションの場の設定において、まずは限られた表現で思いが伝え合えるように「具体的な児童の姿」（表1）の「自分の思いが伝わるような言い方の工夫をする。」「相手の言い方の工夫に注意する。」などを、主に育成することとした。図3は、本単元学習前（以下、事前とする。）と授業後の変化を表したものである。図3の「話す」においては、全員が「当てはまる」「まあまあ当てはまる」（以下、肯定的とする。）と回答した。「聞く」においては、それぞれの回答の児童数に変化はなかったが、事前に肯定的だったA児は授業後「あまり当てはまらない」（以下、否定的とする。）と回答した。しかし、「重要なことを注意して聞き、

表4 “Hi, friends! 2” Lesson 5 単元計画

時	目標(○)	相手				コミュニケーションの場の設定による取組の具体(◆)	積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童の主な姿	予想される伝え方や聞き方の工夫(*)
		学級	中学生	A L T / ネイティブ	ノンネイティブ			
1	◎国名の言い方を聞き、世界には様々な場所があることに気付く。	○	○ A L T	○ A L T	○ A L T	◆外国の紹介をする A L T の姿に触れさせ、児童にゴールの活動と姿への興味をもたせる。	【聞】相手の言い方や、表情に注意して聞く。	*相手の言っていることを、繰り返して言おうとする。
2	◎おすすめの場所について尋ねたり、言ったりする表現に慣れ親しむ。	○	○ A L T	○ A L T	○ A L T	◆母国の紹介をする A L T の姿に触れさせ、伝えるための表現を知り、意欲を高める。	【話】学んだ表現を使う。 【聞】相手の言い方や、表情に注意して聞く。	*相手の表現を使っていることを、繰り返して言おうとする。
3	◎おすすめの場所についての紹介の仕方に慣れ親しむ。	○	○ A L T	○ A L T	○ A L T	◆紹介する内容を A L T や友だちに聞いてもらい、伝わるかどうかを確認させる。	【話】学んだ表現を使う。 【聞】相手の言い方や、表情に注意して聞く。	*相手の表現を使っていることを、繰り返して言おうとする。
4	◎自分の思いが伝わるように積極的におすすめの国を紹介したり、友だちの紹介を聞いたりする。	○				◆学んだ表現を使って、相手に伝わるように紹介させる。 ◆思いが伝わるような表情や言い方の工夫に気付かせる。	【話】自分の思いが伝わるように声の調子や表情に気を付けて言う。 【聞】相手の言い方や表情に注意したり、反応(相づちなど)を示したりしながら聞く。	*伝えたいことを強調したり、笑顔で話したりする。 *相手の表情や声の調子に注意しながら聞く。
5	◎自分の思いが伝わるように積極的におすすめの国を紹介したり、中学生の紹介を聞いたりする。		○			◆身近な質問を 1 つ受け、話題を広げさせる。 ◆思いが伝わる言い方の工夫やジェスチャーに触れさせ、目指す姿を意識付ける。	【話】Yes/Noなどの意見を決めてから伝える。 【聞】相手の言い方やジェスチャーに注意しながら聞く。	*相手の質問に Yes/No で答える。 *相手の声の調子やジェスチャーに注意しながら聞く。
6	◎自分の思いが伝わるように積極的におすすめの国を紹介したり、ネイティブ・スピーカーの紹介を聞いたりして、世界には様々な素晴らしい場所があることに気付く。			○ (ネイティブ)		◆おすすめの理由を増やし、相手に伝わるように紹介させる。 ◆複数の質問を受けたり、多様な英語表現に触れさせたりする。	【話】手振りなどのジェスチャーを付けて話す。 【聞】分からぬ表現を聞き直す。	*写真を提示したり、手振りで表したりする。 *聞き直しの表現を使う。
7	◎自分の思いが伝わるように積極的におすすめの国を紹介したり、ノンネイティブ・スピーカーの紹介を聞いたりして、世界には様々な素晴らしい場所があり、英語を使ってコミュニケーションを図れることに気付く。				○	◆おすすめの理由が明確に相手に伝わるように紹介させる。 ◆英語以外の外国语に出会わせるとともに、母語が違う者同士で、英語を通じてコミュニケーションを図らせる。	【話】手振りなどのジェスチャーを大きく付けて話す。 【聞】分からぬ表現を聞き直したり言葉を繰り返したりする。	*写真を提示したり、手振りで表したりする。 *聞き直しや繰り返しだけでなく、手振りや絵や図なども交えながら聞く。

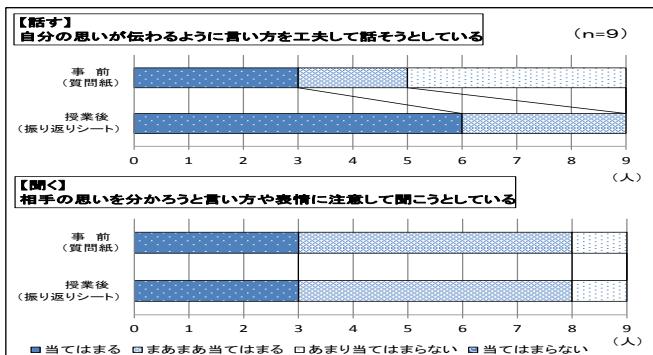


図3 「具体的な児童の姿」(表1)より第4時における積極的にコミュニケーションを図ろうとする主な児童の姿に関する自己評価(以下「主な児童の姿の自己評価」とする。)

相手の声のボリュームで、ここが言いたいことなのだと判断した。」と記述していることから、否定的回答をしながらも、言い方に注意していたことが分かる。また、他の児童の「目を見てくれたので、ちゃんと聞いているんだなと思った。」「今までに習ったことを考えながら聞いたら、友だちの言っていることが分かった。」という記述から、友だちとの関わりを大切にしながらコミュニケーション活動を行うことができていたといえる。

(2) 中学生とのコミュニケーションの場の設定による取組後について

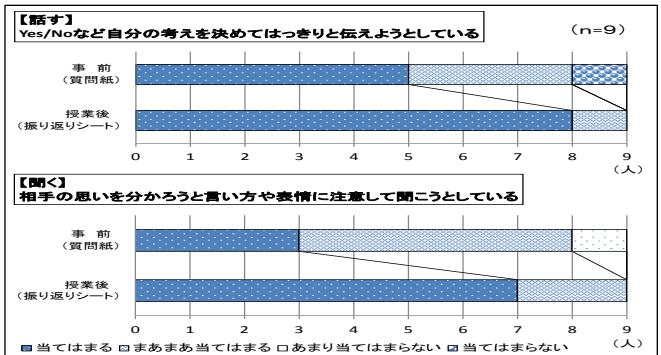


図4 「具体的な児童の姿」(表1)より 第5時における主な児童の姿の自己評価

図4の「話す」「聞く」においては、児童全員が肯定的回答をした。中学生の言い方の工夫や表情などに関わって、笑顔やジェスチャーに注目した児童が多く、「中学生は、はっきりと笑顔で楽しそうに言っていた。」「指で差しながら話していて、写真を上手に使っている。」などの記述が見られた。また、「しっかり反応してくれたり、うなずいてくれ

たりしてうれしかった。質問を入れていて、すごいなと思った。」という記述から、聞く側の反応で話す側が伝えやすくなることを実感できたとともに聞く姿の具体にも触れることができたといえる。

これらのことから、中学生とのコミュニケーションの場の設定による取組は、積極的にコミュニケーションを図ろうとする具体的な姿に触れることで児童の学ぶ意欲が高まり、簡単な質問において明確に答えたり、言い方の工夫や表情などに注意して聞いたりする姿の育成に有効であったと考える。

(3) ネイティブ・スピーカーとのコミュニケーションの場の設定による取組後について

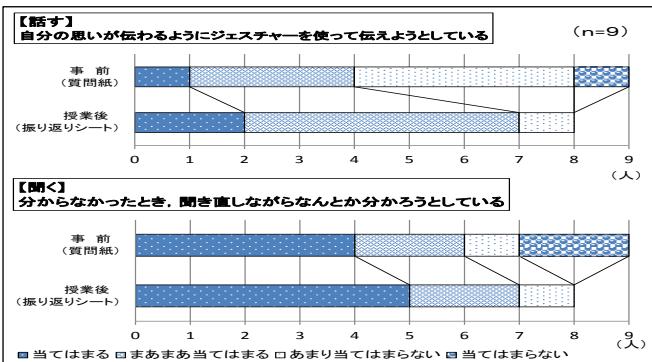


図5 「具体的な児童の姿」(表1)より 第6時における主な児童の姿の自己評価

図5の「話す」「聞く」においては、授業後、児童の肯定的回答は増えたが、それぞれ1人ずつ否定的回答をしていた。(第6時では、9人中1人欠席のため8人で集計)

「話す」で否定的回答をしたB児は、「当てはまる」と回答していたが途中で書き直し、「ジェスチャーをよく考えたら使っていなかった。緊張して写真を指せなかつたから、今度はがんばりたい。」と記述した。B児は、ジェスチャーをもっと効果的に使いたいと考えていることが分かる。「聞く」で否定的回答をしたC児は、「英語の内容あまり分からなかつたところを、反応してくれしく聞きたかった。」と記述しており、気持ちはあったものの行動できなかつたということが分かる。さらに、「日本では見られないような光景で、行ってみたいと思った。」とも記述し、困難さを感じつつも、交流相手とコミュニケーションを図ろうとしていたことが分かる。ジェスチャーを使って伝えようとする姿については、具体的に提示する手立てを取れば、児童の行動につながり、自己評価もさらに向上したと推測する。

これらのことから、ネイティブ・スピーカーとの

コミュニケーションの場の設定による取組は、多様な表現に触れながら新しい情報を得ることで、伝えたい、知りたいという気持ちが高まり、ジェスチャーを使って伝えたり、聞き直したりする姿の育成に有効であったと考える。

(4) ノンネイティブ・スピーカーとのコミュニケーションの場の設定による取組後について

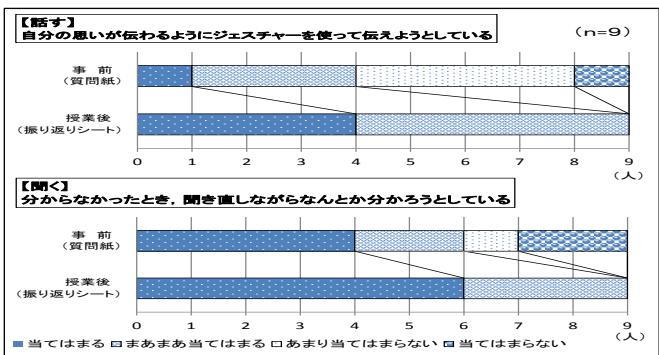


図6 「具体的な児童の姿」(表1)より 第7時における主な児童の姿の自己評価

本時では、前時の反省を生かし、ジェスチャーを使って伝えようとする姿や分からないときに聞き直す姿を具体的に提示した。その結果、図6の「話す」

「聞く」においては、児童全員が肯定的回答をし、前時よりも向上した。「雷門のちょうちんを表すときに腕全体を使って『Big! Very big Chochin.』と言った。」「分からないときは、もう一回言ってもらったり絵をかいてもらったりした。」などの記述から、ジェスチャーを分かりやすく用いようとしたり、分からないところをなんとか分かろうとしたりしていることが窺える。また、第6時で「まあまあ当てはまる」「あまり当てはまらない」と回答した児童が本時ではそれぞれ一段階向上した回答をしていて積極的な態度が前時に比べ高まったといえる。

これらのことから、ノンネイティブ・スピーカーとのコミュニケーションの場の設定による取組は、互いの知っている英語でコミュニケーションを図ろうとして、思いを伝え合いたいという気持ちが高まり、絵や図、ジェスチャーを使って相手に分かりやすく伝えたり、分からないことを聞き直したりして、思いを伝え合う工夫や努力をする姿の育成に、より有効であったと考える。

これらのことから、取組後、それぞれの異なる集団とのコミュニケーションの場の設定が「積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童の主な姿」の育成につながったといえる。

2 異なる集団とのコミュニケーションの場を組み合わせて設定することが、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成につながったか

(1) 事前・事後の質問紙から

積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成につながったかを検証するため、事前・事後の「具体的な児童の姿」について質問を行い、結果を図7、図8に示した。

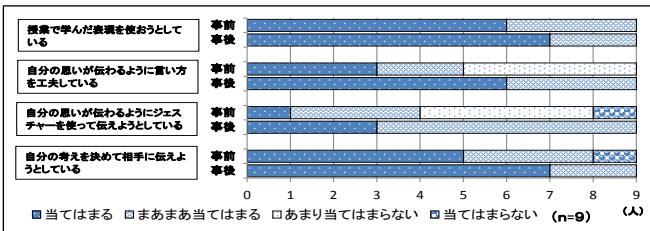


図7 「具体的な児童の姿」(表1)より「話す」の自己評価

図7において、事後、いずれの項目でも全員が肯定的回答をしているが、「ジェスチャーを使って伝えようとしている。」では「まあまあ当たる」が半数以上を占めている。授業後の振り返りシートにおいては、第6時より第7時の方が向上していたが、単元終了後に「当たる」が減少してしまう結果となったのは、ジェスチャーを使って伝えようとする姿が児童にとって他の目指す姿に比べて困難さを伴うからではないかと考える。

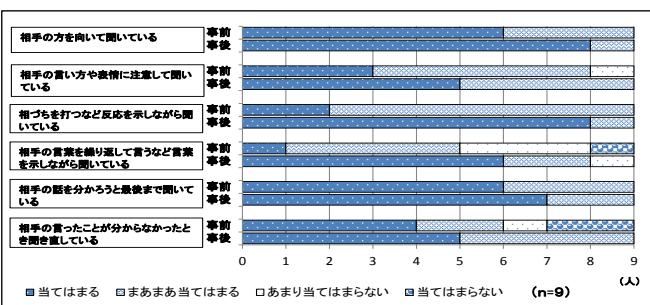


図8 「具体的な児童の姿」(表1)より「聞く」の自己評価

図8において、肯定的回答をした児童数は、いずれの項目も事後の方が増えた。「相手の言葉を繰り返して言うなど言葉を示しながら聞いてている。」という項目に、1名のみ「あまり当たらない」としたC児は、事前の質問紙では「当たらない」と回答しており、以前よりも向上している。相手の言葉を繰り返すことにはまだ不十分と感じているが以前に比べれば意識しており、「具体的な児童の姿」

は向上したといえる。

(2) 事前・事後の外国語活動アンケートから ア アンケートの分析・考察

異なる集団とのコミュニケーションへの興味・関心の高まりを検証するため、「それぞれの相手と外国语を通じてやり取りをしたいか。」について、事前・事後のアンケートを行い、結果を図9に示した。

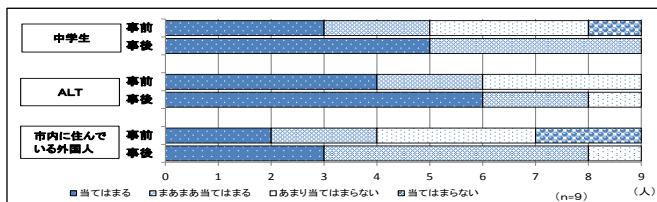


図9 異なる集団とのコミュニケーションへの興味・関心への自己評価

肯定的回答をした児童数は、事前に比べるとどの相手に対しても増えている。一番変化したのは中学生に対してであり、中学生とのコミュニケーション活動にしりごみをしていたC児は、授業後「理由が具体的ですごく魅力が伝わってきた。2回目は相づちをうちながら聞いてくれた。」などと感想をまとめ、事前では「あまり当たらない」としていたが、事後では、「当たる」と回答していた。また、肯定的回答の内訳のうち「まあまあ当たる」が多い項目は、特に「市内に住んでいる外国人」であったが、授業後の振り返りシートでは積極的な態度が高まっている結果が出ており、「近所に外国人が住んでいるから、今度はその人に来てもらえばいい。」と交流に関心をもつ児童もいた。事前のアンケートでも「あまり当たらない」「当たらない」とした児童が「まあまあ当たる」と回答していることから、児童の異なる集団とのコミュニケーションへの興味・関心は高まったといえる。

イ 事後アンケートの記述の分析・考察

児童は、「外国語活動の授業は楽しいです。」の理由について、事前では「英語でゲームやクイズをするから。」としていたが、事後では「外国のいろいろな人と話せるから。」「友だちと英語でしゃべり合うのが楽しいから。」といった内容が見られた。また、「これまでの教材 “Hi, friends!” の授業と比べて、どのような感想をもちましたか。」の事後アンケートでは、9人中6人が「楽しい。」「うれしい。」と答え、他の3人も肯定的に答えている。コミュニケーションを図ったことに触れながら感想を記述している児童が多く、様々な相手とのやり取りについてまとめている主な感想を、図10に示した。

- ・交流がたくさんできて楽しい。
- ・いろんなとの会話で、英語がだいぶ分かるようになってうれしい。
- ・学校に来た外国人は、日本語が使えたり、使えない人でもがんばって伝えようとしたりして、やさしかった。
- ・中学生や外国人の人としゃべった時に、習ったフレーズが通じたし、簡単なことなら（今までに学んだ表現が）使えた。

図10 様々な相手とのやり取りについての主な感想

児童の記述から、複数の異なる集団とやり取りをすることで、英語を通じて会話をしたり関わろうとしたりする意欲が高まっていることが分かる。また、児童の外国語活動の楽しさについて「英語でゲームやクイズをすること」から「英語で会話をすること」を楽しむという質の変容が見られ、コミュニケーションを図ることの楽しさを実際に体験することができているといえる。

(3) D児の変容から

D児は、事前に行った外国語活動アンケートで、「外国語活動の授業は楽しいですか。」との問いに、英語が苦手だという理由で「あまり当てはまらない」と回答した。しかし、事後では、同じ項目に「当てはまる」と回答し、その理由を「話せるようになると楽しいから。」とした。表5は、D児の授業の振り返りシートにおいて「話す」「聞く」に関わっての記述をまとめたものである。

表5 振り返りシートにおけるD児の記述

学級	<ul style="list-style-type: none"> ・リズムよく言えるようにした。【話】 ・強調しているところに注意して聞いた。強調しているところに注意して聞けば、相手が伝えたいことが分かった。【聞】
中学生	<ul style="list-style-type: none"> ・「〇〇は好きですか。」と聞かれたので、Yes/Noなど答えると、サンキューと言ってくれた。【話】 ・ジェスチャーを使っているところに目を向けて聞いた。【聞】
ネイティブ・スピーカー	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の顔を見ながらゆっくり、そして写真を見せながら少しだけジェスチャーをつけた。【話】
ノネイティブ・スピーカー	<ul style="list-style-type: none"> ・写真を指で差しながら言うことができた。【話】 ・特に強調しているところをくわしく聞いたり、分からないときは、何回も聞いたりした。【聞】

それぞれの相手とコミュニケーションを図ろうとする具体的な行動が徐々に変化しており、D児が、相手に応じて工夫や努力をしていることが分かる。また、それまでに獲得した表現だけでなく、前時でのことを生かした工夫も加えながらコミュニケーションを図ろうとしていることも窺え、複数の相手とやり取りを積み重ねていくことで、D児の積極的な態度は高まっていることが分かる。

これらのことから、異なる集団とのコミュニケーションの場を組み合わせて設定することにより、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成につながったといえる。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

異なる集団とのコミュニケーションの場を組み合わせて設定することにより、相手に応じた伝え方や聞き方の工夫をしながら、伝わる喜びや伝える困難さを味わう体験を積み重ねたり、学んだことを次に生かしたりすることができ、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成につながることが分かった。

2 今後の課題

本研究の授業において、ジェスチャーを用いて伝えようとする姿を目指した場を設定したが、他の「児童の具体的な姿」と比べて自己評価が低かった。ジェスチャーについては、指導が不十分であったため、目指す姿を明確に提示するとともに、より必然性を伴う場になるような手立てを仕組む必要がある。今後、場の設定時には、目指す姿の育成に効果的な相手を選ぶだけでなく、その場をより生かしていくような手立てを追究していく。

【注】

(1) 文部科学省（平成20年）：『小学校学習指導要領解説外国語活動編』東洋館出版社、『中学校学習指導要領解説外国語編』開隆堂、金森強（2011）：『小学校外国語活動成功させる55の秘訣』成美堂、萬谷隆一（2012）：「国際理解教育と英語教育」『小学校外国語活動の進め方「ことばの教育として」』成美堂を参考にして、稿者が作成した。

【引用文献】

- 文部科学省（平成23年）：『国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的な施策』 p. 1
- 文部科学省（平成20年）：『小学校学習指導要領解説外国語活動編』東洋館出版社 pp. 7-8
- 萬谷隆一（2012）：前掲書 p. 75
- 多田孝志（2014）：「理論編 小学校外国語活動におけるコミュニケーション活動についての考え方」『小学校外国語活動のツボ』教育出版 p. 146

【参考文献】

- 国立教育政策研究所（平成23年）：『小学校外国語活動における評価方法等の工夫改善のための参考資料』教育出版
 金森強（2011）：『小学校外国語活動成功させる55の秘訣』成美堂
 直山木綿子（2014）：『初等教育資料6月号』東洋館出版社
 直山木綿子（2013）：『初等教育資料2月号』東洋館出版社
 岡秀夫・金森強・萬谷隆一・平木裕ら（2012）：『小学校外国語活動の進め方「ことばの教育」として』成美堂